

## ウガンダゲストハウス〔建設編〕



## 再びウガンダへ

日本からロシア、エジプトを経由して再びウガンダの首都カンパラに到着した。

### カマウ氏との出会い

カンパラの町を歩いていると、ふと日本語で話しかけられた。

「イミグレーションはどこか分かりますか？ウガンダには住んでいるけど、なんか知らない間に場所が変わっちゃったみたいで」

それが、日本から遠く離れたウガンダで実際に小学校を経営するカマウ氏との出会いだった。

彼と話していて、僕は驚くべきことに気づいた。実はカマウ氏とは、半年前に電話で話したことがあるのだ。半年前、現地調査というウガンダでの目的を達成し、日本に戻る前にナイロビに滞在していたときのことだ。ナイロビで宿泊していた安宿でボランティア募集の張り紙を見つけた。ナイロビスラム街の小学校を経営している人が、一日からのボランティアを募集する張り紙だった。

「体験」は旅のキーワードだと思う。幸い僕等には「ジャグリング」と「スボールプール」いう特技がある。こんなこともあるうかと道具は旅行中も常に持っている。

カンパラのディスコ、カバレの刑務所、小学校では交渉したが防犯上の理由からショーはできなかった。

しかも驚いたことに、ナイロビの小学校を経営しているのは、日本人だった。たまたまナイロビで半日時間があったので、さっそく公衆電話から電話をしてみることにした。

「トゥルルルルル………」 「もしもし」

いきなり日本語で出られたので若干戸惑いつつも、用件を話す。相手は明らかに寝起きだった。声から察するに、3～40代の男性だった。結局そのときは時間が合わず、スラム街の小学校でボランティアをするという体験はすることができなかった。

しかし、半年前にわずか30秒電話した相手と、今カンパラの町で偶然会っているのだった。ちょうど昼飯どきだったので、僕等は昼飯をともした。話しているうちに、彼はナイロビのスラムとウガンダのマサカの二箇所に小学校を経営していることがわかった。両方を行き来していて、半年前はナイロビに、ちょうどいまウガンダに戻ってきたところだということだ。それで、ビザ申請のためにイミグレーションを探していたというわけだ。お互い話をするうちに、一度自分の運営する小学校に来てみないか、という誘いを受けた。今回もスケジュールがかなりタイトだったが、現地学校や、建設方法を知る良い機会だと思い、二つ返事をお願いした。カンパラからバスに揺られること4時間程。住んでいる人しか降りないような村に到着した。その村で一番目立つ家が、カマウ氏の家とのこと。水道も電気もない家だったが、かなりおもてなしをして頂いた。翌日、カマウ氏の運営する小学校に向かった。カマウ氏の自宅から歩くこと1時間。ところどころにジャックフルーツの木が生えているのはうらやましかった。小学校は、僕らの想像を遥かに越える規模だった。建物も数棟あるし、先生の数も5人以上はいる。ちょうど授業のある日だったのだが、生徒数もかなりいた。予期せぬ来客に、教室の窓から「なんだなんだ」とばかりに僕らに注目していた。僕らは交渉して、授業をやらせてもらうことになった。科目は体育。スポールボールだ。1クラス約20人の生徒に対して、僕らはスポールボールの授業をした。ウガンダでは、スポーツはサッカーとバレーしかない、しかもサッカーボールなんてみんな持っているわけではない。みんな楽しんでやってくれて嬉しかった。

さらにもう一つ、僕らはショーをやらせてくれないか、という提案をした。昼休みに200人くらいの全生徒を集めてショーをやった。さらに、ちょうどカマウ氏がウガンダの学校をオープンしてから1周年くらいだと聞いていたので、密かにバルーンで誕生日ケーキをつくって渡した。全生徒の前でスピーチをする機会もあった。カマウ氏にはそんな貴重な体験をさせて頂いた。たまたま町で出会った人にこんなことをさせてもらえるんだから、出会ってとても不思議だ。特に旅では、人と出会うたびにいろんな情報が入ってくる。

## そしてカバレへ

僕らを乗せたバスは、カバレの一つ手前の町、ムバララで止まってしまった。時刻は深夜12時を回っている。カバレまで行くつもりできた同乗のアフリカ人達は、文句一つ言わず気づいたらみんなムバララの町に散っていった。気づけば僕らを乗せたバス運転手も、SorrySorryと言い残してどこかへ。

ムバララは地図にも載っているそこそこ大きな町なので、逆に治安などが心配だ。アフリカの場合、大きな町に行けば行くほど治安が悪くなる。一般には、電気も水道もない片田舎の方が危ないイメージがあるけれど、という意味で若干の不安も覚えつつも、僕らは近くのガソリンスタンドで寝ることにした。

予期せぬ寄り道があったが、半年振りにカバレに到着した。到着は深夜2時を超えていた。

早速ビジツアーズホテルに向かったが到着が遅かったため、もう灯りは消え、扉も閉ざされていた。

大声で「ビッグマン～」と叫んだ。

二階で物音がし、ベランダから大きな男の声がした「WHO？」明らかに眠りの邪魔をされて苛立っている声だ。「WHO？」

しかし僕らの姿を認識すると、喜びの声をあげて、すぐに下に降りて扉を開けてくれた。抱き合って感動の再会。さっそく部屋に案内され、疲れていたが、1時間ほど語りあった。この半年間でなにか変わったことはあったか、他のやつらはどうしている、などなど。半年間日本を離れると、おそらく変わっているものがたくさんあるだろう。でもアフリカにくと、半年前がまるで昨日か一昨日のように感じる。アフリカのそんなスローな時間の流れが好きだ。

ウマルが引っ越してしまったこと、ビジツアーズの従業員(ビッグマン以外の二人)は二人とも前回と変わっていたこと、特にイスマイル(ウォッシングマン)は転職して給料が3倍になったこと、タクシードライバーのブラックは出世してカンバラに行って大統領補佐の専属タクシードライバーになったことをかいつまんで聞いた。島を買うそもそものきっかけになったウマルが引っ越してしまったのはとても残念だった。

ビッグマンとの再会を喜びつつ、明日からがいよいよ勝負だと気を引き締める。大学生活一年間をかけたプロジェクトが成功するか否かは明日からにかかっている。たぶん、この一ヶ月間でゆっくり眠れるのは今日だけなのだろうな、と覚悟しながら深い眠りに落ちた。

## ブニョイ湖へ

早朝、ビジツアーズのオーナーに挨拶をし、目の前のチャイ屋で至福のチャイを頂く。ビジツアーズに一泊分の宿泊代を払ってすぐにブニョイ湖に向かう。夜が明けると、まるで僕らを待っていたかのように、ドロズがビジツアーズの前で話していた。

「おぉ、ひさしぶり、元気か？」

かなり驚きつつも、愛嬌たっぷりの顔で彼らは僕たちの帰りを迎えてくれた。

「ブニョイか？」「もちろん」

ビジツアーズホテルの前には常時三名くらいのタクシードライバーが待機している。しかし、カバレの町に同時に三組もの旅行者が滞在することは非常にまれだ。だから、タクシードライバー達はだいたい毎日ビジツアーズホテルの前でたむろしながら話している。

約15分でブニョイ湖に到着する。タクシーを使うと片道8000Ush。

カバレ ブニョイ湖は、週二回だけ定期的にピックアップバスがあるが、それ以外の日はタクシーしか交通手段がない。

一回約500円なのでそこまで痛くはないが、ちりも積もれば山だ。予算は限られているので、できるだけカバレ ブニョイ湖間の移動は少なくすませたい。

このとき、まさかカバレ ブニョイ間の往復のみにとどまらず、カバレ ムバララ間の移動までする羽目になるとは思ってもいなかった。

## ゲストハウス建設準備開始

レイクブニオイにつくと直ぐにクレタベイのダンと再会を果たした。

クレタベイにチェックインを済ませ、今回はクレタベイに拠点を置きつつ、工事の進行次第ではムナニラ島に拠点を移す可能性があるのでフレキシブルに対応してくれと伝えた。

そして、今回の建設プロジェクトの詳細を話す。日本ではノーアイデアだったので、いま僕らが持っている資料は、2日前にカンパラで会ったカマウ氏の学校で、カマウ氏の教え子だった建築士に書いてもらった資料だけだ。ダンにそれを見せながら説明する。

僕らのゲストハウスのイメージは、ちょうどクレタベイにあるコテージのようなイメージだ。クレタベイのコテージ建設の指揮をとっていたダンのチェックはとても心強い。

まず、絶対に必要な工事の現場監督だが、レビに頼むのはどうかというアドバイスをくれた。アフリカでは、年長者は知恵が豊富ということで尊敬されている。村の権力者であるレビが現場監督をしてくれれば、誰を雇ってもしっかり働いてくれるだろうということだ。また、レビが一声かければ働き手もすぐに見つかるだろうということだった。ダンはレビにレターを書いてくれた。

### ヒトはダレだ？

#### (1)現場監督

俺がいないとみんなサボるぞ！！とフンディ、ポーター達の監視役をしている。

しかし彼は僕等がくるといきなり働き出す。

監視役が必要なのは現場監督本人だった。

#### (2)フンディ

フンディとは実際の建築作業も行う建築士のような職業。

フンディはジョラムとゴードンの二人だ。

この二人に今回のプロジェクトを任せる事になる。

自分の家以外建物を建てた事がないとわかったのは建物完成間近の事だった。

ワクワクは人をも成長させる。時給：5000ウガンダシリング

#### (3)ポーター

フンディの指示を受け物を運ぶポーター達。

レンガ、セメント、石など、彼らは何でも運んでくれる。

彼らがたくさんのワクワクを運んでくれた。時給：2000ウガンダシリング

#### (4)カーペンター

屋根をつかったり、窓やドアを取り付けたりする職人。

### モノはなんだ？

レンガ 2,000 個	100,000Ush
セメント 20 袋	400,000Ush
砂一杯	200,000Ush
小石たくさん	160,000Ush
材木	80,000Ush
アイロンシート	150,000Ush
屋根用材木	180,000Ush
釘	17,000Ush
ドア	60,000Ush
窓	20,000Ush
DPC シート	15,000Ush
防腐剤	20,000Ush
器材	500,000Ush

### カネはいくらだ？

別途添付

### スケジュールは？

別途添付

## ゲストハウス建設

### (1) 草刈り

僕らが一番最初に行わなくてはならなかったことは、いままで誰も手入れをしたことのないこの無人島を掃除することだった。島中が、ひょっとしたら僕らの身長よりも高いかもしれないようなたくましい雑草で覆われていた。クレタベイによく出入りしていたバララが、草刈り隊長という大役を買って出た。

「この土地の草を刈るのにどのくらい時間がかかる？」

「10人がかりでやって4日はかかるだろう」

全工程で3週間しかないのに、草刈りに4日もかけるわけにはいかない。

「無理だ、1日でやってくれ」

「いくらなんでも無理だ」

いきなり交渉は暗礁に乗り上げた。そこで僕たちは、完全実力主義を導入することにした。『もし一日で草刈りがすべて終われば、5日分の給料を出そう。二日目以降に終われば一律で3日分の給料を出す。ただし、万が一4日以上かかっても3日分の給料しか払わない。』というルールを導入した。

すべての草刈りが終わったのは、その4時間後だった。

### データ

- 必要な日数

1日

- 必要なヒト

バララ、他9人

- 必要なモノ

鎌(各自が持参)

- 必要なカネ

バララ 10,000Ush(2,000×5日分)

他9人 90,000Ush(2,000×5日分×9人)

計 100,000Ush

### 資材を購入する

草刈りが終わってからの作業では、セメントや砂など様々なモノや工事道具などが必要になってくる。草刈りの現場監督は想くんに任せて、僕は資材の購入のためカバレの町に戻った。今回のプロジェクトでもっとも大量に必要なレンガに関しては、前回来たときにプニョイ湖の対岸に住むレンガ屋に約2,000個をキープしておくように伝えてある。そこで、次に大量に使用するだろう砂を購入するために、1トントラックをチャーターして砂屋に向かう。僕とトラック運転手と砂屋の従業員の3人がかりで30分ほどかかって、大量の砂をトラックが満杯になるまで積み込んだ。さらに砂山の上に工事に必要な道具などを積み込んでクレタベイに戻った。トラック一杯分の砂や本格的な工事道具を買うなんて、そうそうあるものではないだろう。トラックの後ろの砂山に座った僕は、悪路に揺られながら、これから始まる、生まれて初めての経験に、胸がワクワクしてくるのを感じた。



## (2)土台づくり

土地がきれいになったところで、次に行う作業は、ゲストハウスの土台部分の基礎工事だ。そして、この日からはレビが現場監督となり、フンディやポーターたちをまとめた。まず地面に直径4mの正確な円を描き、その円周上を掘って小石や砂を詰めていく。その後上からコンクリートを流し込み、乾くまで待ってから防水シートをかぶせるのだ。そして、その上に一段目のレンガを積んでいくという作業が終われば土台は完成だ。一段目が少しでもずれていると、積み上げていくうちにどんどん不恰好になってしまう。だから一番慎重に行わなくてはならない作業だ。

### データ

- 必要な日数

1日

- 必要なヒト

現場監督、フンディ×2、ポーター×4、コック

- 必要なモノ

小石、DPCシート

- 必要なカネ

現場監督	0Ush
フンディ2人	10,000Ush (5,000 × 2人)
ポーター4人	8,000Ush (2,000 × 4人)
コック	2,000Ush
DPCシート	15,000Ush

-----  
計 35,000Ush

### 昼食

作業中のみんなの一番の楽しみは、もちろん昼食だ。作業期間中は、毎朝8時にみんなが一斉に作業場にやってくる。そこからフンディ、ポーター、僕たちは建設作業を開始し、コックは昼食をつくり始める。手ごろな木を拾ってきて火を起こすところから彼の仕事は始まる。メニューは毎日決まっていて、ウガリと豆スープだ。ウガリというとうもろこしをすり潰してもちもちさせたもので、隣国ケニアの主食だが、東アフリカではどこの国でもよく食べられている。このウガリと豆スープは、彼が毎日原材料のとうもろこしの粉と豆からつくってくれた。風が強い日は火のつき方が悪かったりで天候にも左右されるが、だいたい3～4時間で完成し、ちょうどお昼頃に小一時間ほど休憩をしながら食事をとる。アフリカでは肉は高級食材だ。現場の食事に当然肉なんて入っていない。正直それまで、ウガリや豆スープは嫌いではなかったけれど、うまいと思って食べたことはなかった。でも、現地の友達と同じ汗を流した後に食うウガリ&豆スープは最高にうまい！！





### (3) レンガを積む

土台をつくりおえた後は、その上に一段一段レンガを積んでいかねばならない。これが一番「家を建てている」ことを実感できる作業ではないだろうか。ウガンダ産のレンガはちょっと上から落とすだけですぐ割れてしまうくらい弱い。セメントにしても、とても品質が高いようには思えない。それでも、ジョラムとゴードンは、ゆっくりだが一段一段正確にレンガを積み重ねていった。そして、丸二日が過ぎたとき、家の原型らしきものが出来上がっていた。

彼らは誇らしげに、そしてちょっと照れたようにこう言った。

「It' our work. (これは俺たちの作品だ)」

地球の裏側で、僕たちは職人のプロ意識を感じた。

#### データ

- 必要な日数

2日

- 必要なヒト

現場監督、フンディ×2、ポーター×4、コック

- 必要なモノ

レンガ 2000 個、セメント 20 袋、砂トラック一杯、器材

- 必要なカネ

現場監督	0Ush
フンディ2人	10,000Ush (5,000 × 2 日 × 2 人)
ポーター4人	8,000Ush (2,000 × 2 日 × 4 人)
コック	2,000Ush
レンガ 2,000 個	100,000Ush (50 × 2,000)
セメント 20 袋	400,000Ush (20,000 × 20)
砂一杯	200,000Ush
器材	500,000Ush

-----  
計 1,220,000Ush



## 幻のビールを求めて

当初の予想を遥かに上回るスピードで工事は進んでいた。そこで僕らは、日曜日を休息日にすることにした。僕らは、もし工事が順調に進めば、是非訪れたいと思っていた場所があった。ウガンダの西にあるコンゴ民主共和国(旧ザイル)だ。コンゴ民主はアフリカ内でも1、2を争う危険地帯で、当時もウガンダとの国境からわずか50Kmほど行ったゴマという町を中心に内戦が行われていた。

そんなコンゴ民主にあえて行きたい理由は一つ、「幻のビールとも言われる『ピアプリムス』を是非飲みたかった」からだ。コンゴは元々ベルギー領だった関係で、ビールがとても美味しい。コンゴ民主以外の国ではまず飲むことができず、またコンゴ民主を訪れるのは非常に困難なことが、プリムスが幻のビールと呼ばれる所以だ。

ところが、あまり知られていないけれど実はコンゴ民主をこっそり訪れる方法がある。ウガンダとコンゴ民主は隣り合っているため、国境が存在する。ウガンダのちょうど南西部に位置するカバレから乗り合いバスやピックアップトラックを乗り継いで4～5時間行ったところにブナガナという国境町がある。町のちょうど真ん中に踏み切りがあって、こっちがウガンダ、あっちがコンゴ民主というように分かれている。だいたい世界中どこに行っても国境付近には旅行者が多くいるものだが、旅行者の影も形も見当たらないのはさすがコンゴというところだろうか。

踏み切りの手前には閑所みたいなイミグレーションがあり、気のよさそうなウガンダ人のおじさんがイスに座っている。世界中でいるんな国境を越えたけれど、こんなに和やかな雰囲気役人は初めてだ。僕たちがピアプリムスがどうしても飲みたいからコンゴに入りたいと伝えると、予想外にも二つ返事でOKをもらった。そして、僕たちははいはい旅行者にとって憧れの国コンゴの国境をまたいだのだ！

まずコンゴに入ると、コンゴ側のイミグレーションに行き挨拶をする。コンゴ側の役人の方が怖そうな印象だったが、ピアプリムスを褒めると、気をよくしたのか表情が緩んだ。

30分だけという条件で無事入国した僕たちは、さっそく食堂に入り、ピアプリムスを注文した。

ピアプリムスの第一印象は、「ぬるい」の一言に尽きる。実はアフリカではビールを冷やして飲む習慣があまりない。アフリカではビールは常温で飲む飲み物なのだ。ただ、そのときの僕たちにとって、ピアプリムスがうまいかどうかなんてどうでもよく、旅行者にとっての憧れの国コンゴでコンゴ人たちと一緒に幻のビールと呼ばれるプリムスを飲んでいる、という充実感でいっぱいだった。



#### (4) 屋根 / ドア / 窓を取り付ける

草刈りから始めて、基礎工事、そしてレンガで家を原型の作業をつかっていく、という工程を、なんと僕らは一週間以内に終えてしまった。ここまではすべてが順風満帆だった。そして、いよいよドアや窓を取り付けるという作業に入った。ドア / 窓 / 屋根は、フンディではなくカーペンターの仕事だ。この日からレビが新しく二人のカーペンターを連れてきた。無給のボランティアとして志願してきたノーマンが加わったのもちょうどこのときだった。しかし、「タダほど高いものはない」こんな言い古された格言を思い知らされることになる。結果的に、当初1日の予定だったこの作業の遅延が、僕たちの財布とスケジュールをかなり圧迫した。

#### データ

- 必要な日数

Countless

- 必要なヒト

現場監督、カーペンター2人(内1人は逃亡)、ポーター3人(内1人は逃亡)、コック

- 必要なモノ

いいドア、わるいドア、窓、材木、釘

- 必要なカネ

現場監督	0Ush
カーペンター	40,000Ush
コック	8,000Ush
わるいドア	60,000Ush
いいドア	0Ush
窓	20,000Ush
材木	80,000Ush

-----  
計 208,000Ush



## パッドドア事件

ノーマンと初めて会った時彼は僕らに握手を求めてこう言った。

『俺は君達を通していろいろ勉強したい。給料はいらないから側にいさせてくれないか？』

そう言った後自分の写真にメールアドレスが書いてある彼なりの名刺を渡してきた。

現在東アフリカNO1のマケレレ大学特待生を目指す受験生である彼を僕等は、同じ学生という立場から共感した。彼は無給ながらよく働いてくれた。作業の途中で足りなくなった砂を買うとき、石を買うとき、それを運ぶためにトラックを借りるとき、全て彼がオーナーを紹介してくれて、彼にお金を渡して彼が話しをつけてくれた。

相場よりも少し高いなあと思っていたし、彼がオーナーから若干の紹介料を影でもらっていたのはうすうす気付いていたが、お金よりもスピードと見て見ぬふりをしていた。そして、建物の重要部分であるドアと窓を買う時期がやってきた。

ドアと窓の担当はカーペンターであるマーティンが担当する。僕らはノーマンとマーティンと一緒にカバレタウンに向かった。カバレタウンには数多くのドアや窓を製作している店があったが、ノーマンがこの店が一番いいと言って僕等が他の店を見に行くのも体をはって止めていた。

この店は知り合いの店か？と聞いたが、全く知らないという。

ノーマンがそこまで言うなら僕等はその店でドアと窓を購入した。

2日後ドアと窓が完成し僕らはカバレタウンからトラックでレイクブニオイまで運び、カヌーでムナニラ島まで運んだ！そのドアと窓を見て意外な人が口を開く。

『これはトイレのドアか？』

ワーカーの監視役のレビーがこのプロジェクトで初めて仕事をしようとしていた。

『いやゲストハウスのドアだ！』と僕等が答えた。

その答えを聞いた瞬間に穏やかな顔だったレビーの表情が変わった。

『私達の神聖なる建物にこんなパッドドアはいらない！！これはトイレのドアだ！！』

いやトイレの足場が丁度いい！！』

なんと最高級の木を使用していると言っていたドアと窓が、最低級の木で太陽の光で形がすぐ変形し、色が変わり、そのうち破裂する素材だとのちに判明した。僕等が購入した60,000ウガンダシリングの価値はなくなりなくなった木をあわせて製作したものだった。その場にいたマーティンを問い詰めると彼が自白を始めた。僕等を騙そうとノーマンに話しを持ちかけられた事、そのお礼としてノーマンが店の店員から30,000ウガンダシリングをもらった事を淡々と話始めた。僕等はその場でマーティンの解雇を言い渡した。

そして急いで店に向かった。

『ドアと窓を返品したい、ノーマンと組んで僕等を騙した店員を出せ。』

30秒後その店のオーナーが出てきた。

『あの店員はもういない。首にした。』店員がそう言った。

『じゃあドア、と窓を返却するから金を返せ！！お前がオーナーだろ責任をとれ。』

『それはできない！！従業員の生活がかかっている……』

かれこれ一時間英語で喧嘩をし、最高級の木でドアと窓を作り直すという事で話がついた。ノーマンはその日からパッと僕等の前から姿を消した。その後風のうわさでノーマンがマケレレ大学の特待生に受かった話を聞いた。マーティンの姿も見なくなった。

昔日本にも村八分という制度があった。

アフリカは現在でもこの制度が存在する。

<村八分>

江戸時代において以来、村落で行われた制裁のひとつ。村の秩序を乱した者やその家族に対し、村民全部が申し合わせて葬式と火災の二つの場合を除いて絶交するというもの。

## (5) 屋根を仕上げる

その家に住むウガンダ人の生活レベルは、屋根を見ればだいたい分かる。貧しい人たちが住む家は、屋根には鉄の板を敷いただけだ。僕たちがつくっているようなゲストハウスの場合は、通常鉄の板を敷いて屋根の土台をつくってから、パパイヤの木を敷き詰めて立派な屋根をつくっていく。ところが鉄の板を敷いた仮の屋根ができ、これから屋根を仕上げていくというときになって、僕たちはもっとも懸念していた事態に突入した。持ち金が底を尽きたのだ。頼みの綱は、2日後の給料日に入金される予定の5万円のみ。それまでは身動きがとれない状態だ。しかもカバレには ATM がないので、少なくともバスで5時間離れたムバララまで行かなくてはならない。そして、たとえムバララまで行ったとしても、ATM からきちんとお金を引き出せる保証はない。使用可能国として世界150カ国近くが列挙されているシティバンクカード、使用できない国を明記してほしいと望むのは僕たちだけではないはずだ。

この二日間、コロンビアの失敗体験が僕の頭から離れることはなかった。僕たちは様々なケースをひたすらシミュレーションした。

「森川さん、屋根は鉄板でいいじゃないですか。諦めるのも勇気です。」

「取り組んだら離すな。殺されても離すな、目的完遂までは。」

保守派の想くんと革新派の僕の議論は平行線上をたどった。

### データ

- 必要な日数

2日

- 必要なヒト

現場監督、カーペンター、ポーター2人、コック

- 必要なモノ

パパイヤの木

- 必要なカネ

現場監督 0Ush

カーペンター2人 20,000Ush (5,000 × 2日 × 2人)

ポーター2人 8,000Ush (2,000 × 2日 × 2人)

コック 2,000Ush

屋根用材木 18,000Ush

-----  
計 48,000Ush



## 資金が底を尽きそうになる

僕等は建設資金をためるために工事現場で働いていた。  
ちっちゃな有限会社での仕事だった。  
出発前の数日前も資金稼ぎに働いた。その給料5万円を銀行口座に振り込んでもらう約束だった。  
ウガンダで5万円といったら100万ウガンダシリングである。  
ホテル100泊分、飯1000食分、ウォッシングマンに頼めるクリーニング回数 Countless。  
いや無人島が交渉しだいで買える金額である。  
資材を購入し、ワーカーに給料を払い、滞在費はどんどんなくなっていく。  
そして僕等の資金残高はかぎりなくゼロに近づいていた。  
しかし僕等にあせりはなかった。給料日が来たからである。  
そして給料日から何日かたった日僕等は銀行にお金をおろしにいった。  
お金が入っていない・・・。  
僕等は焦った。途中で帰る事も考えた。ここまできて帰るのか？  
僕等はまず自分達を疑った、給料日を間違えているのか？ただし給料日はあった。  
僕等は次にウガンダのATMを疑った、しかしATMは正常だった。  
僕等は最後に日本の有限会社を疑った。振込みを忘れているのではないのか！！  
国際電話が繋がらない状況で唯一の連絡手段のメールで友達にメールをした。  
友達は僕らが働いていた有限会社の社長に電話して真相を聞いてくれた。  
社長は自白した。  
『正直君達がアフリカに行くとき聞いた瞬間、もう帰ってこれないかと思ってたよ。  
だからお金も必要ないと思っていた。うちも経営が苦しくてね。』  
国を超えてビジネスをする場合、その国独自のカントリーリスクというのは必ず存在する。  
しかし今回日本のカントリーリスクを知るとは思ってもいなかった。  
数日後僕等の口座には5万円が振り込まれていた。

## CD プレイヤーを盗まれる

「森川さん、もうここからは一銭の無駄使いも許されません。」

想くんは無駄使いして買ったコーラを飲みながらそう言った。

カバレ プニョイ湖間の移動で馬鹿みたいにタクシーを使っていた頃がうらめしかった。片道 12,000Ush を払う余裕は既になかった。僕たちは無事お金を手に入れた後も、週二日の乗り合いバスを待つため、カバレに一日滞在した。

そこでふと CD プレイヤーを貸したエリックのことを思い出した。

ビジツアーズの従業員に、エリックが CD プレイヤーを返しにこなかったかと尋ねた。いや、来ていないという返事。彼の豪邸は把握しているので、ボダボダで豪邸まで行った。家の中に入ってエリックと叫ぶ。従業員が何事かとでてきたので聞いてみた。従業員は英語を話さなかったので、あまりコミュニケーションがとれなかったけど、とりあえず「坊ちゃんはどこにはいないでございます。」みたいなことを言っているように思えた。想定外のシナリオになってきた。ビジツアーズに戻ってドロンズに相談してみる。とりあえず豪邸の従業員がなんて言ってるのかを聞かなくてはならない。ドロンズのタクシーに乗って、再度豪邸を訪れた。通訳ドロンズの口から意外な言葉が漏れる。

「あいつはこの家の子どもでもなんでもない。いつもこの家に勝手に上がりこんでいたたちの悪いがきだ。あいつの本当の家は向こう側にあるあの家だ」とりあえず従業員にその家まで案内してもらうことにした。そこには豪邸とは程遠い掘立って小屋があった。彼の父親らしき人物がいた。大統領秘書官とは程遠い顔立ちをしている。職業はタクシードライバーだそうだ。とりあえず彼の部屋に行く。モノはほとんどない、当然 CD プレイヤーなどあるわけがない。そこにはダンボールに入った英語の雑誌や本が思いのほかあった。専門書も多い。どれもウガンダではまず手に入らないような本だ。そういえば彼は言っていた。

「前もカバレにきたアメリカ人と仲良くなって、彼に俺の土地をプレゼントしたんだ。彼からはそのお礼によく本を送ってもらうのだ。」

すべての謎が解けた。彼はカバレに滞在する外国人を専門に狙う詐欺師だったのだ。父親の話では、彼はカンパラに逃げた、とのこと。僕らの帰国日を知った上での犯行だろう。こんな絵に描いたような騙され方ははじめてでとても悔しかった。焼け石に水かもしれないが、警察に犯行を届け出た。カバレの警察は全力で彼を捜し、無事逮捕した際には電話をするといわれた。一応日本の電話番号を書いてきたが、まあまずかかってこないだろう。CD プレイヤーの損害については保険でおろそうと思ったので、警察に証明書を発行してもらった。意味の分からない単語が一つあるので、辞書で調べた。

Suspect (容疑者)

こうして、カバレの詐欺師エリックは CD プレイヤー一つと引き換えに容疑者になった。

## (6) 床を仕上げる

無事入金が確認されたことで、屋根の仕上げは滞りなく完了した。後はフローリングを終えれば、コテージは完成だ。

### データ

- 必要な日数

1日

- 必要なヒト

現場監督、フンディ2人、コック

- 必要なモノ

セメント、砂

- 必要なカネ

現場監督 0Ush

フンディ2人 10,000Ush (5,000 × 2)

コック 2,000Ush

-----  
計 Ush

### 遂に資金が底を尽きる

最終工事である床にコンクリートでフローリングする業務が終了しようとしていた時、

僕等は重要なミスに気付いた。ワーカーの給料を払うお金が足りない……

給料未払い事件を被害を受けた僕等が今度は加害を与える方になっていた。

お金が払えないと彼らに伝えた瞬間、

彼らは建物を壊し、火をつけ、僕等を追い出す。

最悪のケースが頭を横切った。

しかし払えないものはしょうがない。

全業務が終了後、ワーカー5名を呼び、僕等は彼らに工事完成のお礼と給料が払えない謝罪をした。ワーカーは信じられないという顔で僕等をにらみつけて来た。

これは謝るだけではすまない。何か手はないか？一瞬で考えた。

そして余ったセメント袋を見つけた僕等は駄目もとで彼らにこう言った。

『このセメント袋を給料代わりじゃだめだよ。』

しかし、反応は意外だった。すべてのワーカーが了承したのだ。

アフリカでは通常の家は電気も水道もない。それどころか床はコンクリートではなく土なのだ。

高価なセメントを得た彼らの家の床は明日からはコンクリートになる。

それは彼らにとっても悪い話ではなかった。

昔日本にも物々交換という制度があった。

アフリカは現在でもこの制度が存在する。

## (7)庭をつくる

後は時間の許す限り、庭などもつくりたい。僕たちは大好きなバナナの苗木を植えた。次にこの地を訪れるときには、大きなバナナの木になっていることを祈って。

### データ

- 必要な日数

1日

- 必要なヒト

バララ

- 必要なモノ

苗木(バナナ、パッションフルーツ、パイナップル、パパイヤ)

- 必要なカネ

バララ 2,000Ush

苗木 10 本 20,000Ush

計 -----  
22,000Ush

## そしてすべては完成した

ゲストハウス建設プロジェクトが開始してから約1年  
とうとう僕らのワクワクの形であるゲストハウスが完成した。  
完成の夜、僕等はウガンダゲストハウスで最初の宿泊客になった。





電気も水道もない。テレビもエアコンも洗濯機もない。  
でも僕らの目の前は満月の光で溢れている。  
僕らの耳からは湖の水の音が聞こえてくる。  
僕らの鼻からは草の香りが漂ってくる。  
僕らの口には自然から得た水がある。  
僕らの手はこの2週間でぼろぼろの手になっていた。  
だけど、僕らの心からはこれ以上ないワクワクが感じられる。  
そう僕等は今を生きている。ワクワクしていると自然に今を生きられる。  
今にも手をつかめそうな満月が僕等を祝福してくれた。  
その満月が僕等にこう微笑みかけたような気がした。

**人生の目的はワクワクすることにある！**

**もっと地球で遊ぼうよ！**

**もっとワクワク生きようよ！**

こうして僕等のワクワクストーリーは幕を閉じた。



ワクワクを形に変えて！！

## ウマルとの再会

ギリギリのスケジュールでゲストハウスは無事完成した。僕らには、あともう一つだけ、ウガンダでやりたいことがあった。それがウマルと再会することだった。

そもそもカバレに土地を探していた僕たちに、ブニョイ湖という選択肢を与えてくれたのは、ウマルだった。

現地語を教えてくれたのもウマルだった。物事を成し遂げる上で、一番大切な最初の一步。

日本からウガンダまでできてできるかどうか分からないゲストハウスを建てに来る、モチベーションの源泉になったのは、若気の至りといわれるかもしれないけれど、僕らの勢いだ。でも、ウガンダに着いてから、最初にいったい何をしたいのか分からなかった僕たちに最初のアドバイスをくれたのは、ウマルだった。

ウマルとの再会を楽しみに今回もきたけれど、残念ながら引っ越してしまっていた。

ウマル一家にだけは、きちんとお礼を言ってから帰りたい。そんな思いがただでさえぎりぎりのスケジュールだった僕らを動かした。

ドロonzに言われた、ウマルはツウンツウンガモに引っ越した。この一言だけを頼りに、僕たちはツウンツウンガモに向かった。ツウンツウンガモがどんな町なのか、どのくらい大きいのか、もし大きな町だったらその中からウマルを探し出すというのは奇跡的なことなんじゃないか、まったく分からなかった。夕方ツウンツウンガモに到着した。町の規模としては大きくない。町というより村という感じだ。カバレからカンバラまで帰る途中の帰り道の道沿いにその村はあった。おそらく、旅行者なんて絶対に立ち寄らないような村だ。とりあえず入ったチャイ屋で、聞いてみた。「ウマル少年を知っていますか？」「ああ、知っているよ、小学校の校長の息子だろ、俺もその小学校で働いているのだ」とも小さな村なので、奇跡は思ったよりも簡単に起こった。

さっそく挨拶に行った。感動の再会。話は尽きない。今回の転勤で、ウマルのお母さんは校長先生になったらしい。半年経つと、みんななんだかんだ出世しているのだなあ。

その日はウマルの家に泊まらせてもらった。夕飯もご馳走になった。なんと肉がでてきた。肉がかなり高級なアフリカでは、アフリカ人の家に招待されて肉を出されるというのは最上級のおもてなしだ。前回僕らが帰るとき、ウマルは泣きそうで僕らの顔を見ることができなかった。お母さんに、ウマルはとても別れがづらいみたいなの、といわれた。前より成長したウマルは、今回ははっきり僕らの顔を見ながら言った。「また会えるのを楽しみにしているよ」今度は、ウマルの顔をまともに見られなかったのは僕らの方だった。

出会いはいつも一期一会。次会える日がくるのか、くるとしたらそれはいつになるのかなんて分からない。ゲストハウス設立という一つの夢を成し遂げた僕等にまた新たな夢が一つ増えた。それは、

「またいつの日か、ウマルに再会すること！」

## 日本で

日本に帰国し大学の卒業式が終わった。

大学生という身分も最後となる3月31日、僕たちは日本に帰国した後はじめて再会した。

「この半年間の出来事は真実だったのだから？」

ウガンダに行って、島を買って、現地人を雇い、ゲストハウスを建設した。

ただそれだけの事かもしれない。

でもそのストーリーに心がワクワクした。

このことは本当に現地のためになったのだろうか。

多くの人に応援してもらった。

でもそれ以上に批判も受けた。

途方に暮れた事もある。

プロジェクトを辞めようと思った事もある。

ゲストハウス建設を諦めかけた事もある。

でも今はやり遂げてよかったと心の底から思っている。

なぜなら、僕たちのワクワクストーリーがあなたに伝わって、

少しでも何かが変わるきっかけになるかもしれないから。